北の国から～

みやび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
北の国から〜

【Ｎコード】
Ｎ３５３３Ｉ

【作者名】
みやび

【あらすじ】
シンオウ最北の地キッサキシティ。
１４才の少年ケンと同じく１４才の少女ミオの織り成す冒険。
そして彼らはシンオウ全土を揺るがす事件へと巻き込まれていく。

不穏な雪（前書き）

初書きで駄文ばかりですが、読んでやって下さい（＾＾）

よろしくお願いします（＾＾）

不穏な雪

ビョオオオと吹雪く雪。
外に出ていれば半時もせずに何もかも凍てついてしまうに違いない。

そんな豪雪の真っ白な景色の中男が一人佇んでいた。
寒さを防ぐためだろうか、厚い防寒着に身を包みバンダナ式の耳当てを付けている。

「…ここが…キッサキ神殿か…」

男はしげしげとその荘厳な石造りの巨大な神殿を眺めている。

と、そこにエリートトレーナーであろう女が近づいて来た。

「…ここは神聖な場所であり許された者しか立ち入ることができません。どうかお引き取り下さい」

言葉から推測するに神聖の守護者といったところか。

しかし男は彼女の進言をまるで無視するかのように神聖へ進もうとした。

「…それ以上進むなら…」

女は回り込みスーパーボールを取り出す。

ふっ、と小さな笑みを男が漏らした。

「…何がおかしい？」

女は胸の前でボールを構えたまま男に問う。

「別に君を笑ってなどないさ。…ただ単純にこの神殿の圧倒的な姿にこの私など、いや人間などなんてちっぽけで儚く愚かな存在なんだ、と思っただけだ」

女は何も言わない。

また少し風が強くなってきたようだ。

二人の周りの木々は叫びのようなうねりをあげ不気味さを増していく。

そしてほんの一寸先も真っ白になり見えなくなったその時だった。

「今回は引き上げるとしよう。ただの観光だ…」

雪で何も見えない真っ白な空間の中、男の声だけが聞こえた。

女は尚警戒を解かなかったが吹雪が止み、男がいないことを確認するとまた再び神殿の入り口へと戻った。

身も凍るような寒さのはずだったが、女の体は汗で湿っていた。

ケン（前書き）

さてはて、この男は一体…？

ケン

「ふわぁあああ…」

朝日が燦々と辺りを照らし、夕べ積もった白銀がキラキラと光る。

そんな中今日誕生日を迎える少年、ケンは目を覚ました。

「うーん……」

ベッドから降りひとつ大きく背伸びをする。

彼の毎朝の日課だ。

そしてケンは部屋の窓に近付きカーテンを思いっきり開けた。

「うっわ〜っ！すげ〜！！」

感嘆の息を漏らすと不意に後ろからトタトタという足音が聞こえた。

ケンは後ろを振り返る。

「おはよう、ゆかり。外見てみる？今日の雪はとびっきりきれいなんだ♪」

ゆかり、と呼ばれたユキワラシはひとつコクンと頷くとケンにすり寄った。

「よしっ」

ケンはゆかりを抱きかかえると窓の桟にゆかりを乗せた。

一瞬光の反射に目を細めるが徐々に開いていく。
そしてゆかりの大きな目が完全に見開かれたときにはゆかりは桟の上で飛び跳ねていた。

「ニーッ、ニーッ♪」

と声も弾ませている。

「良かったな～綺麗なもん見れて」

ケンはゆかりを優しく撫でながら話しかける。

ゆかりはケンの方を見つめると白い歯をキラキラに光らせニカッと笑った。

「ケン～っ！！起きたの～！？ミオちゃん来てるわよ～！！！」

突然階段の下から聞こえてきた大きな声。

「母さんだ！しかもミオも居るって♪」

ケンはゆかりに話しかけるとゆかりとともにドタドタと階段を降りていった。

「お～ミオ。おはよっ！」

ケンが元気に手を上げる。

「ニーッ♪」

ゆかりも同じように手を上げる。

「おはよ、ケン。朝から元気いいのね。それにその揃った挨拶。まるでゆかりちゃんと兄妹みたい」

くすくすとミオが笑う。

白いニットキャップにマフラーとジャケット。
長過ぎず短い過ぎずといったピンクのスカートからは健康そうな足が見えている。

男がいたら１０人が１０人とも振り返りそうなその容貌。
もちろんケンとて例外ではなかった。

「…ケン、そんな変態チックな顔してないでさっさと服着替えて顔洗ってきなさい…」

ケンの母、ミカは呆れたように言う。

「なっ、そ、そんな顔なんてしてないって。な、ミオ？」

「そんなことより私も着替えてくるのには賛成なんだけど」

再びくすくす笑うミオ。

そしてケンはその言葉を聞くなりダッシュで階段を駆け上がったのだった。

「ごめんなさいね、変な息子で…」

ミカは、はぁ…とため息をひとつする。

「いえいえ、ケンは変な男の子なんかじゃないです。だってあの時ケンが守ってくれてなかったら、私…」

「そうね、そんなこともあったわね…」

ミオの過去（前書き）

―ミオの過去―

ミオの過去

「ケンちゃん、待ってよ～ぅ！」

「ほらミオ頑張れって、あと少しなんだから」

「そんなこと言っても私女の子なんだよぅ…」

5年前の初夏、まだ9才だったケンとアキは叡智湖に向かってかなり急な岩場をよじ登っていた。

ことの発端はケンの一言。

―――――――

―――――

―――

―

「なぁ、ミオ。叡智湖ってさ、大人しか行ったらいけないんだよな。でも行ってみたくない？」

「えぇ、でも危ないよぅ」

「大丈夫だって、いざとなったら俺がお前を守ってやるからさ！」

「…うん。約束だよ。絶対守ってよね」

「あぁ！」

――――――――――――――――

しかしながらケンはすでに約束のことなどすっかり忘れているようによじ登っていく。

ミオとの距離もまた少し広がった。

ケンの頭の中はまだ見ぬ未知の叡智湖のことでいっぱいらしかった。

「…ケンちゃん…私もう無理…」

「何言ってんだよ。もうちょとで登れるだろ」

「…ヒック、エグッ…。うわぁあああああん！！！！」

「な、ちょ、ちょっと。泣くなって！」

「や〝ぐぞぐじだ、ケンちゃんや〝ぐぞぐじだじゃんっ！…ヒック、エグッ…」

大の大人がポケモンの秘伝技を使ってやっと登れるほどの岩場。
それを人間が、しかも幼い子供が登るのはやはり無理だったようだ。

ミオの手も足も岩で打ったためにできた青あざが出来ていた。

今となって後悔の念がケンを襲う。

俺、ミオを守るって約束したのにっ！
なんて俺はバカなんだ！

「ミオ待ってろ。一緒にゆっくり降りよう」

「……うん」

叡智湖なら、また成長した時にでも行ける。
今はミオが大事だ。

ケンはそう思いそろそろと岩場を降りて行く。
しかし結構な高さまで登っていたため下を見るといくらケンとはいえ足がすくむ。
しかし、ゆっくりと確実にケンはミオに近づいて行く。

「…ミオ、ごめん。さ、一緒に降り…」

ケンがそう言った時だった。
ガラガラ…と嫌な音を立ててミオが足を置いていた岩場が突然崩れだしたのだ！

「あ〝っ、あぁ…ケンちゃーん！！」

スローモーションのようにミオが滑る。

すると、ケンは飛び降りミオを抱き締めた。

ミオには、これ以上ケガなんてさせないっ！

ケンはミオの頭をしっかりと自分の胸に押し付け自分が落ちた時下になるように体をよじる。

だんだんと元いた場所が遠ざかり、反対に地面が近づいてくる。

もうダメだ！

そう思った瞬間ケンとミオはボフッ！と何かに突っ込んだ。

ひんやりとした空気が二人を包む。

ミオはどうやら気絶したらしい。

眠っているように目を閉じていた。

な、何だこれ？

雪！？

ケンは自分の周りにある物を握りしめてみる。
ひんやりと冷たい感触。手の熱で溶ける感覚。
雪以外の何物でもなかった。

「いつつ…一体だれがこんなことを…？」

キョロキョロを辺りを見ると小さな影が２つ見えた。

「えっと、キミ達が助けてくれたの？」

影がだんだんと近づいてくる。
それはまだこどものユキワラシとニューラだった。
「もしかして、こなゆきのクッションを作ってくれたのかな？」
二匹は互いに目を合わせると胸をはるような仕草をした。
「ははっ…ありがとう」

「…ん、う〜ん…」

「!?ミオ?大丈夫か?」

ケンはまだ自分の腕の中にいるミオの名前をを必死に呼んだ。

「……あ、ケンちゃん…」

「ミオッ…ミオ、ごめん…」

ケンは腕の中のミオに頭を下げる。

「…ううん、謝らないで」

「でも俺、絶対守るって約束したのに…」

「最後はちゃんと守ってくれたじゃん」

そう言うとミオはニコッと笑った。

ケンは泣きそうな風に顔を歪ませる。

不甲斐ない自分を許してくれるミオが温かくてしょうがなかった。

「…あなた達が助けてくれたんだよね、どうもありがとう」

ユキワラシとニューラは再び胸を張る。

雪は初夏の日差しを浴び瞬く間に融けていく。

「冷たいね」

「あぁ、すごく冷たい」

「クスッ…」

「アハハハハ！」

2人とも何が可笑しいのかわからなかったが、笑わずにはいられなかった。

ユキワラシとニューラも一緒に笑った。

――――――

―――
―

「ケンちゃんだけじゃなくて、この子もいなかったらどうなってたのか、って考えると未だ怖いんですよ」

ミオはそう言うと腰のホルダーからボールを取り出しニューラを出し頭を撫でた。

ゴロゴロとニューラの喉の鳴る音がする。

「本当にあの時は驚いたわ。息子の帰りが遅いと思って玄関を開けた時、傷だらけでおまけにずぶ濡れのあなた達がいたんだもの。腰がぬけちゃうかと思ったわ」

「すみませんっ」

ミオが慌てたように謝る。

「ま、結局はあのバカ息子が悪いんだけどね。ミオちゃんをあんな目に遭わせたりして」

「ホンット、そうですよね」

ミオが悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「ぷっ！」

「あははっ！」

「おーぃ、俺がいない間に何面白そうな話してるんだよ」

「ケンには関係ないもんね～♪」

「何だよそれ？」

まさか自分がこんなに笑われているなんて思いもしないケンであった。

「ケンちゃんだけじゃなくて、この子もいなかったらどうなってたのか、って考えると未だ怖いんですよ」

ミオはそう言うと腰のホルダーからボールを取り出しニューラを出し頭を撫でた。

ゴロゴロとニューラの喉の鳴る音がする。

「本当にあの時は驚いたわ。息子の帰りが遅いと思って玄関を開けた時、傷だらけでおまけにずぶ濡れのあなた達がいたんだもの。腰がぬけちゃうかと思ったわ」

「すみませんっ」

ミオが慌てたように謝る。

「ま、結局はあのバカ息子が悪いんだけどね。ミオちゃんをあんな目に遭わせたりして」

「ホンット、そうですよね」

ミオが悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「ぷっ！」

「あははっ！」

「おーぃ、俺がいない間に何面白そうな話してるんだよ」

「ケンちゃんには関係ないもんね～♪」

「何だよそれ？」

まさか自分がこんなに笑われているなんて思いもしないケンであった。

さぁ、出発！（前書き）

さぁ、出発！

さぁ、出発！

「それじゃ、本当に行くのね？」

「あぁ、善は急げっていうし、ゆかりも早く外の世界を見たがってるみたいだしさ。それに、ミオのアカリも」

ケンは隣のミオの足元にいるニューラのアカリの頭をポンポンと叩いた。

ケンは青いジャケットに赤いハンチング帽、ベージュのカーゴパンツといったいかにも旅行者な格好をしている。

肩からはポケットの多いやや大きめの白のショルダーバッグを提げている。

見た目よりも機能性を重視したいかにも彼らしいバッグだ。

ケンが１４才というこの地方での区切りの年を迎え、旅に出発するにあたり多くのキッサキシティの住民がケンの家の周りに集まっていた。

ケンの家の隣にミオの家もあるため二人揃って出発の式を挙げているのだ。

ケンの家の周りにいるギャラリーの中には、キッサキシティジムリーダー、スズナの姿も見える。

彼女はまだ17才という若さでポンポン協会公認ジムリーダー登用試験に合格し、氷ポケモンのエキスパートとしてこのキッサキのジムを任されている。

ミオの憧れの人物でもあった。

そもそも、このポケモンの住む世界、カントー、ジョウト、ホウエン、シンオウでは多くの子供は10才になると相棒であるポケモンを連れて旅に出るというのが一般的である。
その旅人の多くはポケモン協会公認の地方に各8っずつ置かれているジム戦を勝ち抜きジムバッヂを手に入れポケモンリーグを目指したり、ポケモンコンテストと呼ばれるポケモンの演技や技の美しさを競うコンテストでの上位入賞を目指す。

しかし、その道のりは大変困難なものであり、ジムバッヂ一つの獲得や、一番ランクの低いコンテストの入賞もせずに大半の者がリタイアしていく。

１０才の子供であるだけに、１ヶ月も持てば十分であるとされる。

この１０才になった子供を旅へと送り出すというこの国の慣習はいつ頃、何のために始まったか定かではないが、今では多くの大人が子供に自然の素晴らしさやポケモンの大切さ、旅で出逢う人々との交流、そして何より自分の命の大切さを気付かせるためであると認識している。

１０才であるためかなり危険ではないかという意見もあるが、地方の随所の治安維持や人名救助を担当しているポケモン協会公認のポケモンレンジャーが各地に配属されているため、大きな犯罪や事故などは皆無と言っていいほどである。

そして、ポケモンレンジャーは１０才から始めた旅で音を上げず２０になるまでやりきった、という強者ばかりである。

その一方、旅を途中で諦めた者はその悔しさを胸に何かに没頭するものが多い。

この国の化学の発展には目を見張るものがあるが、それらは全てバトルやコンテストとは違う形でポケモンと携わろうとした彼らによるものである。

さて、ほとんどの地方は１０才で旅を始めるのに対し、ここキッサキでは何故１４才から旅を始めるのか？

それはこの街の厳しい環境に由来する。

もともと、テンガン山を抜けなければ辿り着けないこのキッサキ。

逆に言えばこの街から出るにはテンガン山を通るしかないのである。

テンガン山はシンオウ一高い山であり、その高さはカントーとジョウトの間にあるシロガネ山に匹敵する。

大の大人が通り抜けるのにも一苦労するテンガン山を通るのにはたった１０才の少年少女には不可能に近い。

手持ちのポケモンが『そらをとぶ』を覚えていれば話は別だが、それさえも戦闘外使用をするためにはあるジムの協会公認バッヂを所持する必要がある。

かつてこの技…秘伝技と呼ばれる技を使用しての犯罪が多発したためと言われている。

仮にバッヂを持たず秘伝技を使用しようとすると、旅人が必ず所持しなければならないトレーナーズカードに埋め込まれている音声センサーが、トレーナーの指示する声を感知し、ポケモンの嫌う電波を出してポケモンが技を出せないようにしている。

戦闘中に技を出すときは、トレーナーズカード内にある別のセンサーがポケモンがバトル中にのみ出すとされる、特別な脳波をキャッ

チし使用制限を解除するのである。

この画期的なトレーナーズカードの開発により、今ではポケモンの秘伝技を使用した犯罪は絶滅していると言っても過言ではない。

また、トレーナーズカードとは、旅人が出発するまでに地方のポケモン協会へ申請しなければならないものである。

入会金と年会費が必要となるが、このカードを持っていればポケモンセンターの利用。フレンドリィショップでのポケモン捕獲用ボールの購入。

その他多くのポケモントレーナーとしての特権を得ることができる。

言うまでもないが、入会金、年会費はポケモンセンターの運営、ジムの運営費用などにあてられる。

またカードは5年ごとに更新するかどうか選択できる。

トレーナーズカードを持って初めてポケモントレーナーと名乗ることができるのだ。

話が大分逸れたが、要するに１０才の駆け出しトレーナーではテンガン山を抜けられないだろうという判断の元、このキッサキシティでは１４才での旅立ちになっているのである。

話は先程の場面に戻る。

「ケン、これがあなたのトレーナーズカードよ。絶対なくさないように、大切にしなさい」

そう言うとミカはケンにまだ新しいピカピカのトレーナーズカードを渡した。

「うん、絶対なくしたりなんてしないさ」

「絶対よ。あとこれはお母さんからの誕生日プレゼントよ」

ミカはそう言うと丸く、とても美しく光る宝石のような石を渡した。

「ありがとう、母さんっ！…でも、これって何？」

「いつかきっとわかる日が来るわ。それまであなたが旅を続けられてたら、だけど」

ミカはそう言うと母親としての優しい表情を浮かべた。

「大丈夫だって、心配なんていらないさ。な、ミオ」

「うん、私たちなら絶対大丈夫だよ！」

二人は笑い合う。

「じゃあ、母さん、それにみんな！俺たち行ってくるよ！！」

「あっ、ちょっと、ケンちゃん！？」

ケンはそう言うなり、ミオの手をとり走り出した。
ゆかりとアカリはすでにボールの中。

「頑張れよ～！！」

「すぐに帰ってくんなよ～！」

「ミオちゃ～ん、ケンには気を付けて～！」

「ケン、ミオちゃん…無事に帰ってくるのよ…」

様々な人の思いを受けて、今、ケンとアカリの冒険が始まった！

さぁ、出発！（後書き）

少し説明が長くなってしまいました…汗

さぁ、いよいよ次からケンとミオの冒険が始まりますっ！

出逢った人は？【1】

二人は並んでゆっくりと歩いている。
街からはもう大分離れたところにいる。
雪を被った木々がキラキラと光る。
そこら中で雫の落ちる音がする。

二人の目の前は真っ白で、二人の後ろにはケンとミオの足跡だけが点々と残っていた。

「ねぇ、ケンちゃん、ちょっと聞きたいことがあるんだけど？」

「ん？何？」

「トレーナーズカードを持ってない人って秘伝技使い放題だよね？」

「あ～それなら試験と人格判断面接で免許取れるって聞いたことあるような…。バッヂ持ってない人はそうやって秘伝技使ってるって聞いたけど。」

「車の免許みたいな？」

「うん、そうそう。たしかそんな感じ」

「ふ～ん…」

旅は始まったばかり！

「よし、着いたな…」

「五年ぶり…だよね」

先程の会話の場所から歩いて一キロ程の場所にケンとミオはたどり着いた。

そう、五年前、ふたりがやんちゃをしてひどい目に遭った場所。
そしてふたりがゆかりとアカリに出逢った場所でもあった。

「ゆかり、出てきてくれ」

「アカリ、お願い」

二人はボールを岩場の始まる場所に投げた。
元気のいい鳴き声とともにゆかりとアカリが飛び出す。

「でもケンちゃん、本当に大丈夫なの？ゆかりちゃんもアカリも秘伝技の『ロッククライム』を覚えてないんだよ」

ミオは過去のことを思ってか少し不安げに眉を寄せた。

「今度こそ大丈夫だって♪『ロッククライム』がないと俺たちはゆかりやアカリと一緒に登れないけど、アカリだけなら登れるだろ。な、アカリ？」

「ナ～ォ♪」

アカリは元気に頷く。

「じゃあ、アカリ。このロープを持って上まで登ってくれないか？そして登ったら丈夫そうな木にこのロープをしっかりと結びつけて欲しいんだ」

そう言うとケンはアカリのお腹の周りに軽くロープを結びつけた。

「アカリ、気をつけてね。絶対よ！」

「ナ！」

ミオの言葉を聞くやいなやアカリは勢い良く岩場を登っていった。

その姿に心配することなどまるで杞憂だった。

「よいしょ！っと…やった…着いた～っ！」

「ちょっと、そんなに大きな声出さないでよ。…でも、ついに登っ

ちゃったね♪」

「あぁ♪」

アカリからロープを渡されたあと、ミオを先頭にしてロープを伝いながらエイチ湖のほとりまで二人はたどり着いた。

ミオを先頭にする際、もしミオがバランスを崩した時には俺が支えてあげるから、といかにも男らしい言葉をケンは言ったが、崖を登っているときのミオを見上げるケンの顔がかなりの変態チックなものだったということからも、ケンが下心丸出しだったということは容易に想像できるだろう。

しかし、ロープを伝いながら崖を登ることは、五年前より成長した彼らにとって、それほど大変なものではなかった。

逆にあまりにも簡単に登れたことで、拍子抜けしてしまった程である。

「アカリ、有難う、お疲れ様」

ミオはアカリをボールに戻した。

「それにしてもすごい眺めね～♪」

「うん、晴れてるから、かなり遠くまで見渡せるな」

エイチ湖のほとりから高くそびえるテンガン山の方を眺めると、この冬のキッサキ周辺の天気にしては珍しく快晴であり、大雪原がまるで銀の海のように見えた。

「初日でこんなにいいものが見れるなんて…本当素敵」

遠くを見つめるミオの顔はどこか大人びていて、ケンは顔を赤らめた。

「ありがとね、ケンちゃん。今度はちゃんと連れて来てくれて」

「あ、あぁ、当たり前だろっ！」

幼なじみのいつもとは違う一面を垣間見、ドキドキとしていたケンにとってはそう答えるのが精一杯だった。

【2】

「ミオ…旅が終わったら、またこの場所に戻って来ようぜ」

「うん、その時も2人一緒に、だよ」

「…！あぁ！」

（ミオのやつ、俺の気持ち気付いてんのかな…？ま、いいか、これからも2人で旅が出来るんだし…もっと距離が縮められるといいな…）

ケンがそう思い、地面に置かれているミオの手に、自分の手を重ねようとしたその時だった。

「ケンちゃん？」

「なっ、何かな？」

慌てて手を引っ込めるケン。

「何か、声が聞こえない？」

何か注意されるだろうと思っていたケンは少しほっとしたような表情をする。

「人間の声？」

「うん、そう。なんかボソボソ聞こえてくる」

ミオの言葉を聞きケンは耳をそばだてる。

「……で……よね……」

「そ……な、こ……う」

（……！？）

確認できる声は２つ。

声の高さなどから判断するとどうやら男と女であるようだ。
しかし話し手が遠くにいるらしくどうにも何を言っているかが聞き取り辛い。

（思い切って近づくか？）

「なぁ、ミオもう少し声のする方まで近…って、おい！！」

ケンがミオの方を向いた時には、すでに彼女はアカリを連れ声のする茂みに入って行こうとしていた。

「ちょ、ちょっと待てって！」

慌てて追いかけるケン。

そしてすぐにミオの隣に追いついた。

「おい、どういうつもり…」

「ちょっと静かにして。気付かれたらどうするの？」

（俺が悪いのかよ！）

茂みの中から声のする方を見ると、黒い格好をした大人の女性と、白衣を着た老人が何やら難しい顔をして会話をしていた。

「…やはり何かこのシンオウによくないことが起こりつつありますね…」

「ふむ…このエイチ湖のユクシーの力が最近安定してないのはその為か……」

（ユクシー？何だそれ？）

聞いたこともない言葉に疑問を生じたがケンは口には出さなかった。

ケンとミオは尚も息を潜める。

「これは我々ポケモンリーグ協会員としては放っては置けない問題ですね。…近いうちに各ジムリーダー、四天王、バトルフロンティアの者に召集をかけましょう。不穏な芽は一刻も早く取り除くに限りますから。…その時はナナカマド博士にも来て頂きたいんですが

…」

「うむ、それが最善だろうな。私も是非その会議に出席しよう。…それから…ここだけの話なのだが…」

「どうされました？」

（ここだけの話？それより、さっきからこのお姉さんと爺ちゃんは何のことを話してるんだ？）

話に好奇心が湧き、だんだんと体が前のめりになるケン。

そしてそれに気づいたミオがケンを注意しようとした、その時！

「ナ～ォ！ウニャアッ！！」

アカリが突然鳴きだしたのだ。

一体全体どうしたんだ、とミオとケンはアカリを見る。

と、アカリの前に金色に光り輝く球体が浮かんでいるのがわかった。

アカリはジャンプをして引っ掻こうとするが、若干届かず、自慢のかぎづめは空を切った。

「ケ、ケンちゃん？何なの？あれ？」

「いや、俺にもわかんないよ…でも、敵ではないような気がする、かな？」

「アカリ、もう攻撃するのは止めてっ！」

ミオの指示が聞こえるとアカリは大人しく従いジャンプを止めた。

「アカリ戻ってき…」

「そこにいるのは誰だッ！？」

ッ！！！！！！？？

（流石に気付かれたか！）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3533i/

北の国から～

2010年10月9日03時51分発行